ISSN 2433-2747

北陸大学図書館報

NO.56

◆◆　第 23 回読書感想文・第 5 回書評コンクールとビブリオトークを終えて　◆◆

図書館長・薬学部教授　　大黒　徹

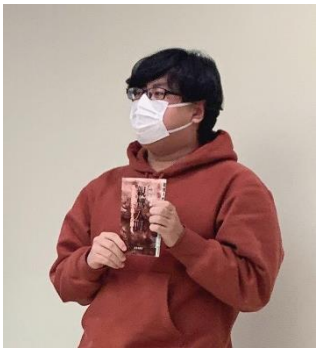
はじめに令和 6 年能登半島地震で亡くなられた方々に謹んでお悔やみを申し上げるとともに、負傷された方々、避難されている方々、被害にあわれた方々に心よりお見舞い申し上げます。被害を受けられた皆様の安全と一日でも早く平穏な生活に戻られますことをお祈り申し上げます。本学図書館も多数の被害を受けましたが皆様のご協力により何とか復旧作業を行い、再び歩み出すことができました。遅ればせながら復旧に際しご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

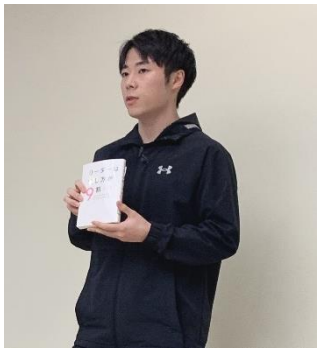
さて、このたび第 23 回読書感想文・第 5 回書評コンクールが実施され、読書感想文 230　編、書評 27 編の応募作品がありました。コンクールに参加してくれた学生の皆さんと本学教員・ 職員・関係者の方々に御礼申し上げます。誠にありがとうございました。厳正なる審査の結果、最優秀賞 1 名（読書感想文）、優秀賞 5 名（読書感想文 4 名、書評 1 名）、佳作 9 名（読書感想文 6 名、書評 3 名）、努力賞 13 名（読書感想文 12 名、書評 1 名）の計 28 名と、ベストタイトル賞 1 名（読書感想文）を、各学部 1 名ずつの図書館委員 4 名と図書館事務課 1 名の計 5 名で選出させていただきました。皆さん一人ひとりの作品を読ませていただき、読書で疑似体験することで得た心情・思考を自分の文字で発信することが如何に大切かを改めて認識しました。次年度もより多くの作品が寄せられることを期待しております。また、表彰式・ビブリオトークを令和 5 年 12 月 20 日（水）に図書館 4 階ソフィアルームで開催しました。ビブリオトークでは、人生をみつめるような作品、愛をテーマにした本、宗教に関するもの、リーダーシップを発揮するための話し方、聞き方に関する本など、様々なジャンルの本が紹介されました。今回のビブリオトークを通じて、読書をして心を揺さぶられたり、自分の経験に重ねて共感したりといったことの重要性を再認識しました。インターネットで簡単に情報が手に入るようになり、さらに生成 AI や人工知能など人が考えなくても文章が作成できる時代が到来していますが、人間にしかできないことを鍛えることが本当に重要になってきたと実感した次第です。最後に、作品の受理や集計に関わってくださった図書館課事務課職員の皆様、そして応募作品を真摯に評価してくださった審査委員の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

◆◆　第 23 回読書感想文・第 5 回書評コンクール表彰式　◆◆

◆◆　ビブリオトーク開催　◆◆

令和 5 年 12 月 20 日(水)、第 23 回読書感想文・第 5 回書評コンクール表彰式の後、ビブリオトークを行いました。
今年は佳作受賞以上の学生が参加し、和やかな雰囲気の中で行われました。
ビブリオトークでは、優秀賞受賞の学生が自分の選んだ本について、その本を読んだきっかけや本の内容などを熱く語りました。表彰式に参加できなかった最優秀賞受賞の学生のビブリオトークも動画で紹介しました。
普段から読書をする学生のみでなく、これまであまり本を読んでこなかった学生も、このコンクールを通じて読書の幅を広げることができたようです。





◆◆　読書感想文・書評コンクール入賞者が読んだ本　◆◆

入賞者が読んだ本は、本館（太陽が丘）に所蔵していますので、是非、読んでみてください。
（薬学部分館は一部所蔵しています。）

第 23 回読書感想文・第 5 回書評コンクール
審査結果発表

応募作品257（読書感想文230・書評27）編の中から、次の作品が選ばれました。

入　賞　作　品

最優秀賞（読書感想文の部）

宮崎琴音さん	網目の中、生み出す人になるために	（薬）５年

優秀賞（読書感想文の部）

越田開成さん	流れ星が堕ちる	（薬）５年
上村朋代さん	娘である私が読む視点	（薬）１年
花山勝薫さん	今を精一杯生き、よりよく死ぬ	（薬）１年
堀井梨央さん	誰のための『愛』なのか	（薬）１年

優秀賞（書評の部）

高村勇気さん	優れたリーダーとは	（経）３年

佳　作（読書感想文の部）

千秋璃々香さん	予防のために取り除く処置について	（薬）３年
辻谷侑海さん	優しさとは	（薬）２年
小道世羽奏さん	命の尊さ	（薬）１年
友野貴美子さん	人の死とはどこからなのか	（薬）１年
中村優奈さん	幸せを見つけて	（経）１年
矢野菜月さん	誰もが抱える孤独と、つながることの大切さ	（医）１年

佳　作（書評の部）

石垣風空さん	男と女のすれ違い	（国）２年
土田りのさん	性別に捉われないその人らしさとは	（国）２年
徳堂深月さん	『歩きながら考える』を読んで	（国）２年

努力賞（読書感想文の部）

高木みなみさん	他者への思いと自分の願い	（薬）３年
石井麻尋さん	私が見る世界	（薬）１年
齊藤帆花さん	強く生きる	（薬）１年
中野碧乃さん	人それぞれの生き方	（薬）１年
山内美咲さん	命とは何か	（薬）１年
渡辺由菜さん	一人の人として	（薬）１年
山下泰昂さん	人生に仕掛けを	（経）４年
池田栞萌さん	余命 10 年	（経）３年
竹内大史さん	「USJ を劇的に変えた、たった１つの考え方」を読んで	（医）１年
横山音葉さん	木曜日にはココア を読んで	（医）１年
島内泰河さん	君たちはどう生きるか	（医）１年
福田泰生さん	辛さを乗り越える勇気	（医）１年

努力賞（書評の部）

東條優音さん	多文化共生社会実現に向けて	（国）２年

ベストタイトル賞

本間大介さん	ヘルマンが思い出させてくれた景色 （書名『庭仕事の愉しみ』）	（経）２年

＊（薬）は薬学部、（経）は経済経営学部、（国）は国際コミュニケーション学部、（医）は医療保健学部です。

最優秀賞（読書感想文の部）

網目の中、生み出す人になるために

薬学部 薬学科 5年次生　**宮崎 琴音さん**

書　名　君たちはどう生きるか
著　者　吉野　源三郎
出版社　マガジンハウス

この夏、一本のアニメ映画が注目を集めた。宮﨑駿監督の『君たちはどう生きるか』だ。引退を宣言した巨匠の10年ぶりの作品。一切予告なし、突然の上映発表。ジブリ好きの友人と出かけていた時に私はその存在を知った。そして驚いた。ここ数年の間、書店で何度も目にし、「いつか読まなければ」と思いながらも、重そうな題名に敬遠していた本と同じ題名だったからだ。そんな作品を宮﨑駿が映画にしたと聞けばつい興味が湧いてしまう。友人から話を聞いた場所は海辺だったはずなのだが、その日の夕暮れ時には二人そろってスクリーン前に座っていた。

映画は、正直「よくわからない」作品だった。目の前で不思議なことが次々と起きて、放り出された気分だった。消化しきれない感情を抱えて呆然とするほかなかった。最後の手掛かりは、本である。すぐさま書店へと向かった。映画をきっかけに、ずっと手が伸びなかった本に手が届いた。

主人公は15歳の少年、コペル君。本名は本田潤一。背は小さいものの勉強もスポーツも万能ないたずら好きの少年だ。そして、コペル君というあだ名の名付け親で、本書の重要人物が叔父さんである。裕福な家に生まれ、エリートが集う中学校に通うコペル君が、日常で出会った出来事について博学な叔父さんと対話をする。そして叔父さんが社会やものの見方といった学問以外の大切なことをコペル君へ託す物語だ。「世の中の多様性を知れ、外見ではなく心の豊かさに目を向けろ、自分が恵まれた環境にいるからといって奢るな、豊かさに感謝して学問の頂点まで学び活躍しろ」といった内容が盛り込まれていた。これから社会に出る若者にとって示唆に富んだメッセージが詰まった一冊だ。

私がこの本を読んで心に刺さったのは「君は生産する人と消費する人という、この区別の一点を、今後、決して見落とさないようにしてゆきたまえ。」という叔父さんの言葉だった。私は薬局での実務実習で、介護施設の現場訪問に複数回同行した。認知症高齢者のグループホームは自分が想像していたよりずっと生活感にあふれていたが、それと同時に死が隣り合わせの生々しさがあった。薬局内では医師や施設からの問い合わせ対応や緊急の薬の配達と現場の忙しさに直面した。次々と状況が変化する環境の中、適切に情報をさばきつつ、患者さんの容態や家族の心情に思いを馳せる職員や薬剤師の姿はまさしくプロの姿だった。

そんな中私といえば、忙しい状況を後ろで眺めながら、ただついて歩き「若いね。これからだね。」と声をかけられるのに対して笑って応じるだけだった。自分が見てこなかっただけで、超高齢社会を直に背負った現場が存在することを体感し、ニュースや本といった安全なところで医療を知った気になっている自分がとても頼りなく、情けない存在に思えた。まさに「生産する人」と「消費専門の私」の違いが見えた時間だった。学生は何も出来なくても許される。でも大人になるということは、「誰に褒められなくとも自分の役目に責任をもって何かを生み出すこと」なのだと感じた。

一方でポジティブに捉えられた出来事もあった。それは指導薬剤師が服薬指導をしている姿を見て「薬学って楽しい」と思えたことだった。ドパミンのようなガツンと来る気分の高まりではなく、じわじわ来る思いだった。薬剤師のかっこよさは「化学の視点を持った医療人」として「知識で人の役に立つ」ところにあると私は思っている。検診で引っ掛かり不安そうなおばあさんが血液検査値と生活習慣を基にアドバイスを受け、晴れやかな顔をして帰って行かれた姿を目にして私はとても嬉しくなった。叔父さんの言葉「いまの君は、何よりもまず、もりもり勉強して、今日の学問の頂上にのぼり切ってしまう必要がある。そしてその頂上で仕事するんだ。」を思い出した。薬剤師になろうと思ったのは中学1年生の時で、その間10年にいろんな苦労や悩みがあった。しかし、進歩する医療を舞台とし、情報と知識を味方にして働く薬剤師は、やっぱり私の憧れだと思った。そして自然と自分の内側から出てきた感情に気づいたとき、私は自分が空気を掴む感覚で勉強してきたことが肯定された気がした。
―目標が見つかった。

『君たちはどう生きるか』というタイトル通り、この本は読む人に生き方を問いかけ、自分で答えを出せと言わんばかりに正解を教えてくれない。映画もそうだった。解釈つかない何かを表現し、本へといざなった。コペル君は物語の最後で「今は何も生産できなくともいい人間にはなれる。そしてすべての人がよい友達であるような世の中に役立つ人間になりたい。」と叔父さんに伝える。私は「今はしっかり学問を修め、信念をもって何かを生み出せる人になりたい」と考えた。期待を受けて努力できる環境で自分を向上させられる日々は、大人になれば得難い貴重な時間だろう。自分が手を差し伸べられる人や役立てる能力を増やしていけるのが本当に幸せだ。いろんな業界や人が見えない糸でつながっている網目のような社会の片隅、自分が選択した薬学という分野で輝ける人になりたい。今まで受けてきた大人たちからの応援を形にして還元したい。今の小さな学びの積み重ねがいつの日か社会を豊かにする影響力へ成長すると期待して、残りわずかの学生生活を精一杯過ごしていこうと思った。

審査委員講評　**大黒　徹**（図書館長・薬学部教授）

引退した宮崎駿監督が 10 年ぶりに製作し昨年夏に公開された話題作『君たちはどう生きるか』を鑑賞するところから本作品は書き始められている。そしてその感想は、「よくわからない」と表現され、そこから原作である吉野源三郎著の 1937 年に出版された『君たちはどう生きるか』に手を伸ばしたとあった。彼女はこの本を読んで「君は生産する人と消費する人という、この区分の一点を、決して見落とさないようにしてゆきたまえ。」という箇所が心に刺さったと書き記している。彼女は薬剤師を中学 1 年生で目指し始め、その後にいろんな苦労や悩みを抱えながら空気を掴む感覚でそれでもがむしゃらに勉強してきたと述べている。そして薬局や病院実習の現場を体験してみてやっぱり薬剤師が憧れの仕事だと感じられ、自分がこれまで行動してきたことが肯定された気がしたと表現していた。そして最後に「今はしっかり学問を修め、信念をもって何かを生み出せる人になりたい」と記しており、また一歩しっかりと目標に向かって歩みを踏み出したと選者は実感した。

優秀賞（読書感想文の部）

流れ星が堕ちる

薬学部 薬学科 5 年次生　**越田　開成さん**

書　名　信仰
著　者　村田　沙耶香
出版社　文藝春秋

私は相も変わらず不毛な学生生活を満喫している。私は小さい人間であるから、朝起きてから、夜布団に入るまでの間に人の悪口を言わなかっただけで己が高潔さに酔いしれ、第２のブッダもしくはキリストなのではないかと錯覚してしまう。この錯覚が高じて、何度か新しい宗教を立ち上げようかとも考えたが、一度寝て目が覚めると現実を思い出す。
こうして書いているとあまりに哀れである。誰か同情してほしい。

人は生きる上で何かを信仰して生きている人が多数だ。例えばそれは教えであったり、概念であったり、物であったり、人であったり。しかし私には信ずるものが今のところ見当たらない。それどころか他者の信仰を懐疑的な立場から見つめてしまうことがほとんどだ。
そんな折に、ひときわ怪しい輝きを放つ本と出逢った。「信仰」。本来ならば神聖さや高潔さを感じられる二文字

だったろう。だがこの本からは神聖さ、高潔さなど微塵も感じられず、訝しさだけが残る。表紙には、緑の蛍光ペンで描かれたであろう落書きのようにみえる大きな4つの流れ星と、その中に描かれた「信」と「仰」の文字。「信仰」とともに星に乗ってそのまま堕ちていきそうなイメージにめまいを覚えながら、本を手に取った。

『信仰』の主人公、永岡は「原価いくら？」が口癖の現実主義者だ。幼いころから
「え、型抜き一回200円？　ぜったいおかしいよ」
「このかき氷、氷とシロップだけで500円なんて、ぼったくりだよ。あっちのお店にいこ、200円だったよ」と声を上げていた。
最初は周りから感謝されていた。感謝の言葉は彼女を満たし、周囲の人がうっかり損をしないようにという名分のもと、エスカレートしていった。最終的に彼女の度の過ぎた現実主義により周囲からは人が離れた。さらに、妹から
「お姉ちゃんの『現実』って、ほとんどカルトだよね」
といわれたことで彼女の「現実」への信仰が揺らぎ始める。
そんな時、地元の元同級生である石毛に新しくカルトを始めないかと誘われる。同じく元同級生であり、過去に浄水器のマルチ商法にはまっていた斉川も加わり、カルト商法の話が進められていく。『信仰』はこの現実的ではない「カルト商法」と、主人公・永岡の信仰する「現実」がぶつかり合い、彼女の信仰する「現実」の本当の姿が見えてくる物語だ。

私はこの物語によって、自分自身の「信仰」に気が付くことができた。
「現実」の信仰から脱却するため、カルトに申し込もうとする主人公に対して、カルトを信仰し教祖とまでなった斉川が放った言葉がある。
「私、本当に、浄水器でみんなを幸せにしようと思っていたの。みんなのためを想ってたの。今度こそ、本当に幸せにしたいの。始まりはカルトだって、それで世界中の人が救われたら、それは真実になるわ。そう思わない？」
息が詰まった。心当たりがあった。とある有名人を信仰している友達が「〇〇はこれがいいって言っていた」と言いながら謎の習慣を始めたのを知った時、その有名人が過去に起こした不祥事や、過去に勧めていた習慣との矛盾点を指摘しながら、「どんな人間もなにかしらの矛盾を孕んでいるだろうから、信じすぎないほうがいいよ」とアドバイスをしていた。これはいわば、他者の幸せを本気で願い、周りの人へまっすぐに「信仰」を勧める。主人公や斉川と同じだ。つまり、私――越田開成の信仰は「信仰しないこと」だったのだ。
信仰に気づくことはできた。しかし、どうすればよいのだろう。信仰からの脱却が頭をよぎったが、これは作中で永岡が試みている。物語の最後、カルトのセラピーによってほかの参加者が夢や幻の世界に羽ばたいている中、彼女は最後まで「現実」という信仰、カルマに囚われたままだった。
ならば残された道は、この信仰を抱いて生きて行くことだけだろう。物語の中で永岡は、自らの信仰を周囲に押し付けることにより、孤立し、結果自身の信仰が揺るがされるにまで至った。
では私の場合は、他者の信仰を尊重すればよいのだろうか。否である。他者の信仰を尊重することもまた、自らの信仰の揺らぎにつながりかねないと思う。
だから私は、その先がたとえ奈落の底につながっていようとも、己が信仰を胸に抱き、信仰と共に堕ちていきたい。

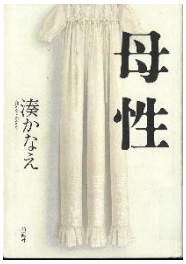
審査委員講評　**畑　友佳子**（薬学部助教）

クセが強い。この感想文はかなりクセが強いぞ。と思っていたら、やはり越田さんの作品でした。さて、題材となった「信仰」もかなりクセが強い物語でした。カルトを創造する者、それにハマる者、ハマらない者、その違いはなんだろう。そもそも「信仰」とは、、、？
物語を読み、「信仰」とは、宗教に限らず、その人の信念や価値観、内面を表現するものではなかろうか、と私自身、考えるに至りました。そして、この物語を通して、越田さんは自身の「信仰」を見つけたようです。うん、なるほど。
是非皆さんもこの物語に触れ、自分自身の内面を見つめてみてはいかがでしょうか。

優秀賞（読書感想文の部）

娘である私が読む視点

薬学部 薬学科 1年次生　　上村　朋代さん



書　名　　母性
著　者　　湊かなえ
出版社　　新潮社

私はこの本を読んで、母性とは何なのか、女性には元々身についているモノなのかを考えさせられました。私は今、両親と共に暮らし、両親に頼って生きています。学費から生活費までのすべてを負担してくれて、何不自由なく暮らしてきたのが私です。だから、ずっと子供のままでいたいと思う時があります。でも、いずれは大人にならなくてはならなくて、もしかしたら結婚や出産があるかもしれません。そのときがきてしまった時に、私は大丈夫だろうかと考える作品でした。

この本は、母と娘の視点が切り替えられて進んでいく作品です。母ルミ子はその母から愛情をたくさん受けて育ってきて母のことが大好きな人物です。だから、娘が自分の母から愛情を受けているのが許せず、すべての愛情を自分が受けたいと思っています。しかし、それでも娘のことを愛情深く育てていると思っています。反対に、娘清佳は母の顔色をいつも伺ってどうすれば母が自分に愛情を注いでくれるかを模索し続けている人物です。しかし、何をしても空回って嫌悪の表情をされます。しかし、母は普通に接しているつもりなのです。二人の思いが交錯しあっているのが見所に感じました。ここで二人の共通点は、母から愛情を一番に注がれたいと思っていることだと思いました。二人とも母にとって子供のままでいたいのだなと感じ、私はいつまで母の子供でいられるだろうと考えました。母になったら子供ではなくなるのか、それともずっと母の子供ではあるのかと母になるときの疑問がわきました。

ルミ子にとっては母がすべてであり、娘よりも大切な存在です。しかし、その母はある事故によって、自分の娘を守ったことによって亡くなってしまいます。二人の生活はそこから大きく変わっていきます。二人はルミ子の夫の実家に引っ越し生活することになりました。でも、夫の母は二人を部外者として扱い、とても冷たく意地悪に接します。それでも母ルミ子は義母に認めてもらえるように一生懸命働きます。娘は、こき使われている母を助けたいという気持ちで祖母に反抗し、娘だけでなく母も夫の母からもっと嫌われることになります。そこで母は、自分の努力が娘によって台無しになったと感じます。この時から、もっと母の娘に対する憎悪や嫌悪の感情や態度があらわになっていたように感じます。しかし、娘からすれば、ただ母に愛されたいだけなのです。ここでは、どちらの感情も理解することができ苦しかったです。

そして最終章である事件が起きます。ある出来事によって娘は、祖母が自分を助けるために自殺したことを初めて知ったのです。そのショックを母に話し、泣き崩れます。この場面が一番のすれ違いです。母は泣き崩れる娘に優しく接し抱きしめたように感じ、娘は祖母を自殺に追い込んだことで恨んでいる表情をした母から首を絞められていると感じます。二人の違いに驚きました。そこで娘は責任を感じて自殺を図り、その場に駆けつけた母が気を失った娘に、作中で初めて清佳と名前を呼び、娘と認識したことが分かる場面になりました。そこで私は、初めて名前が出てきていなかったことに気づいて驚きました。

この作品を読んで、私は最初に娘に感情移入をしました。何をしても母に嫌われて、それでも必死に母に愛されようとする姿がかわいそうでたまりませんでした。私自身が子供であることも相まってこんな風に接されたらと思うと、すごく苦しい気持ちになりました。しかし、今の状態のまま母になったらどうなるだろうと考えたとき、娘に母のように接することはできないかもしれないと思いました。だから、どちらの感情も否定してはだめだなと思いました。でも、できることなら今のように愛し合っていたいです。

私は、女性は生まれたときは母性なんて一つもないと思います。あるのは母に愛されたいという気持ちだけだと思います。でも、いつか母になったとき母からもらった愛情を子供に与えられたらいいなと思いました。そうしたら母性は生まれてくると思います。

この作品で思い描くような母には簡単になれないことが分かりました。また母は誰かの子供であることを忘れてはいけないと思いました。今回は娘である私が読んだので、次は母になったときに読むと、どんな気持ちになるのかを知りたいです。

審査委員講評　**服部　託夢**（医療保健学部　医療技術学科准教授）

上村さんが本書から感じた母性に対する思いや感情についてよく表現されている。本書で示された母と娘それぞれ異なる視点の思いと自身の考えについての共感や疑問から気づいた自分が将来抱くであろう感情についての葛藤が書かれていた。母性について女性だからといった性別による偏見は良くないと思うがやはり男性には理解し難い何か違った感覚があるのだろうと思う。同性だから抱く感情の物語について、母親、母親になった妻、娘のいる男の立場である私ならどうか？と考えさせられた感想文であった。

優秀賞（読書感想文の部）

今を精一杯生き、よりよく死ぬ

薬学部 薬学科 1年次生　**花山　勝薫さん**

書　名　親鸞入門：その生涯と教えの深さ
編　者　前田專學/山崎龍明
出版社　永田文昌堂

「明日ありと思う心の仇桜、夜半にあらしのふかぬものかは」この短歌が、この本で一番私が衝撃を受けたところである。これは親鸞が九歳の時に詠んだ短歌であるとされている。私はこの本を読むことで、如何に自分が深く考えていなかったかを思い知った。親鸞は九歳の時点で夜に得度に行き、慈円に追い返されそうとした時に自分の命を桜に例え、今でなければ桜は散ってしまうかも分からないとし、得度を許された歌である。自分を比喩し、希望的観測ではない未来について語ることを九歳の時点で出来るだろうか。私にはできなかった。このことから私の中での親鸞という人は聡明であるイメージが定着した。

そしてその親鸞の信仰思想の中でも重要な往生思想は、私にとって完全に理解することは難しかった。この往生思想とは本願他力の教え、悪人救済の教え、往生成仏の教えのことである。特に私は悪人救済の教えについては昔から理解できなかった。悪人を救済する必要性は薄いのではないだろうか。しかし、この本を読むうちにその考えが少し理解できた。悪人すら救ってしまう懐の深い教え、それは『即得往生』という考え方による教えであることが分かった。「信心をうる時、直ちに往生する」即得往生の意味を読み進める前に少し考えてみた。その材料となったのが、私の父の話である。昔、父は南無阿弥陀仏さえ死ぬ前に唱えれば阿弥陀仏に救われると言っていた。そこから考えた結果、悪人であれ死ぬ直前までに南無阿弥陀仏を唱えたのなら信心を得たとし、往生して浄土に生まれることができることだと私は捉えた。しかし親鸞曰く、その後にさらに「成仏(真のさとりを開く)」までが往生であるという。私は浄土とはなんだろうと考えた。この世界が綺麗なものではなく、阿弥陀仏によって生まれ変わる、悲しみのない世界が美しいものであるために浄化された土で浄土と表現するのだと考えた。そうならば現世は何と呼ぶのか、親鸞によると穢土であった。このように表現するのが適切であると思えた。私たちはこの穢れた土の上に生きており、阿弥陀仏の世界でもない限りは醜い争いも避けられない。この本を読み進め、仏教に、世界について考えるうちに、私の視点はどんどん俯瞰的になっていることに気付いた。

最後に仏教とはどのようなものか、何のためにあるのかと私は考えた。「人は自分を意識した時、同時に老い、病み、死ぬことに対する恐怖や心配、苦しみや悩み、貪ぼり・瞋恚(いかり)・愚痴などの問題を持ち始めている。そして、それらを解決するため、具体的な行いや深い考えをはじめる。なぜなら、人間は行い、考え知ることがいつも関心事になるからだ。」その結果生まれたのが仏教であるため、仏教とは人生と向き合う学びであるということなのだろうと捉え、仏教の教えが難しいことにも納得がいった。

親鸞の話から少し逸れるが、この本の表現法についても秀逸であると感じさせられる部分があった。例えば「『六時礼讃』を美しい節をつけて朗詠する声明の大家であった。いわば今日のアイドル歌手的な存在であった。」という言い回しからはユーモアのセンスがあると感じた。アイドルと例えると一気に親近感が湧かないだろうか。昔の文化を今風なもので例えることで一気に引き込ませる手法には脱帽である。そのようなところからも、分かりやすい教えの解説も、この本を入門と呼ぶに相応しいと感じた。

私がこの本で一番影響を受けた言葉は、「よく生きることがよく死ぬことにつながり」「よりよき死のためには、

よく生きなければならない」である。今思えば、最初の短歌も今を精一杯生きようとする親鸞の生き様・心意気がよく現れており、見習わなければならないと感じざるを得なかった。今を豊かに楽しく生きるためには、常に精一杯生きなければならないのではないだろうか。私も様々なことを先延ばしにし、自分の尽くすべきことを本気で行わずに後悔し、その瞬間をつまらなくしていたことが多々あった。私はこの本を読んで、自分の人生を豊かにしたいと思った。そのためにできることを精一杯頑張り、後腐れなく死ぬことができる人間を目標としたい。

審査委員講評　**南谷　直利**（経済経営学部　マネジメント学科教授）

表彰式後のビブリオトーク（書籍の推薦内容と書評を聞ける活動）において、「親鸞聖人の教えの入門として導入学習できる」点が紹介されていた。これまでに、南無阿弥陀仏や舎利弗等を声に出したことがある程度の門外漢の自分にとって、今回は親鸞聖人の教えに関して、大変勉強になった。

現世には生・老・病・死・愛別離苦（あいべつりく）・怨憎会苦（おんぞうえく）・求不得苦（ぐふとくく）・五蘊盛苦（ごうんじょうく）の四苦八苦の苦しみがある。現世ではこれらの苦しみは、無くならないであろう。

往生は現世―苦しみに満ちた所なので穢土（えど、けがらわしい大地の意）ともいう―から、浄土―仏国土、清浄、無差別の世界―に生まれることである。阿弥陀仏によって浄土に往生できると信じること、それを信心獲得（しんじんぎゃくとく）という。阿弥陀仏を信じて辛い現世を精一杯に生きること、それが信心獲得したものの生き方であろう。

理想と現実は違う。同一でないと感じている。それでもまずは、今の恨みや憎しみや怒りを忘れ去ることから始めよう。そしてやりたいことに専念し、一日一日を大切にして懸命に生きる所作を身に付けたいと思う。皆さんにも本書を一読してほしい。

優秀賞（読書感想文の部）

誰のための『愛』なのか

薬学部 薬学科 1年次生　**堀井　梨央さん**

書　名　汝、星のごとく
著　者　凪良　ゆう
出版社　講談社

『愛』とはなんなのか。この壮大なテーマにまだ誰とも交際経験のない私が分かるのか。『愛』について今まで深く考えたことがなかった。それでも、私がこの物語を読んだ後、『愛』の尊さと理不尽さに心が震え、夜明けとともに涙が頬をつたっていた。決して全てを理解できたかというと、そうでないのかもしれない。ただ、この物語の『愛』に触れ、思わず涙が零れたのだ。

この物語の主人公は、瀬戸内の島に住む十七歳の暁海。父の不倫により精神的に不安定な母のケアをしながら過ごす。そして、男に依存する母に連れまわされ京都から島に引っ越してきた同級生の櫂。二人は似たような境遇から心を寄せ合うようになり、付き合い始める。どちらの母親も自分勝手でどうしようもない毒親だ。もし自分が彼らの親の子供の立場であったら、苦労するだろうという簡単な言葉では言い表せられない気持ちが必ずあるだろうし、耐えられないと思う。しかし、暁海と櫂は、決して母を見捨てることはなかった。本当に優しくいい子なのだと思った。二人は結ばれ、将来は幸せになるべきだと思うほどに。

櫂は高校卒業後、漫画原作を書き東京でデビューして成功した。島に残っていた暁海は、久しぶりに櫂に会うため東京へ行ったが、櫂は暁海に高級なものばかり買ってあげるが暁海にとっては自分が惨めに感じることだった。これは、櫂は暁海のことをすごく愛くるしく思っての行動であったが、暁海には真逆の意味に受け止められた。私は暁海に共感し、同時にかっこいい女性だと思った。現代の男女づきあいでも女性は男性におごられるとか、守られるとかは、見下されていると思ってしまい、女性は男性の良かれと思ってとった行動を嫌がる人は少なくない。私も男性にそのようなことをされたら、対等ではない関係がこれからも続くと想像すると不安に思い、愛し合いながら生涯を共に過ごせる自信はない。暁海はそれを感じたのだと思う。けれども、櫂は人気漫画家であるためお金は持っていて、そこにつけ込む女もいた。それに惑わされず自分を持ち続けていた暁海は芯のある強い女性だと思った。暁海は自分のことを弱い人間だなんて言うけれど、そんなことはない、あなたは立派な人間だと言いたい。

それからは、暁海と櫂に価値観の違いが生じ、二人は別れてしまった。
　その後、暁海は生活が困難な状況になってしまい、地元の高校時代の先生と結婚する。決して二人は愛しあったから結婚したわけでもない。あくまでもお互いの人生のためだ。先生が暁海に聞いた「きみは『ひとりで生きる』ことが怖くはありませんか？」という言葉が私にも問いかけているようで少しの間ページをめくる手が止まった。私はひとりで生きていけるようになりたいが、ひとりはいやだ。人生百年といわれるこの時代にこれから長い人生をひとりで生きることは怖い。先生は「自分で自分を養える、それは人が生きていく上での最低限の武器です。結婚や出産という環境の変化に伴って、一時的にしまってもいい。でもいつでも取り出せるよう、メンテはしておくべきでしょうね。」という。この言葉は凄く心に響いたものだった。私は今、薬剤師を目指している。これも、もしひとりになったとき、生きていけるための手段を確保するためにこの夢を選択した理由の一つだ。結婚は愛し合った人同士が奇跡的にめぐり逢ったのち結婚をするものだと思っていたけど、お互いの生涯のための結婚することも選択肢のうちにあることに、心に余裕ができて安心した。
　一方、櫂は相方の報道によって職を失い、病を患ったのだ。しかし暁海は、「わたしは愛する男のために人生を誤りたい。」と、既婚者であるにも関わらず、櫂と最期を共に過ごすことを選択した。櫂から離れていても愛する気持ちは忘れられず、櫂の存在は自分が思っていたよりも大きなものだったのだと思う。客観的に見れば浮気といえる。だが、作中の「自分を縛る鎖は自分で選ぶ」という言葉のように、世間がなんと言おうと自分たちの『幸せ』を貫き通す姿が、どうしようもなく尊く、ギュッと心を締めつけられた。
　この本を読むまで私は、恋愛にもあまり興味を持たず、私にとって恋愛とは自分と相手を縛り付けるものとばかり思っていた。この本を読んでからは、人の愛し方や関わり方がこんなに自由でいいのだと少し心が軽くなった。お互いを支え合え、自分を大切にして想いを寄せる人を大切にできる人間になりたいと思う。
　そして、この物語の『愛』というのはすべて優しい形はしていない。「相手にどうか元気でいて、幸せでいて」、と思う裏腹に、「わたし以外を愛さないで、わたしを忘れないで」、と思う執着した『愛』も感じ、「愛と呪いと祈りは似ている」という言葉が『愛』の表現の奥ゆかしさに気づかされた。そんな複雑な形をしている『愛』を、次は自分の人生の中で見つけたい。その中に、自分で選択した道で掴む『幸せ』があると信じて。

審査委員講評　**田邊　良和**（図書館事務課長）

　堀井さんが選んだ本書は大変奥深く読書感想文を書くのには難しかったと思いますが、よく読み込んで書かれた素晴らしい内容であったと思います。
　主人公とその友達は一度愛しあいましたが、価値観のズレから離れ離れになり、主人公は生活苦から高校当時の教師と結婚することになります。その結婚の理由である「ひとりで生きることが怖い」、その言葉に私自身も共感しました。必ずしも「愛」のみで生きていけないのも事実です。
　堀井さんが書かれているように、薬剤師の資格は「ひとりになった時でも生きていける手段」となります。今後、生きていく中で、堀井さんなりの「愛」を見つけていくと思いますが、その体験を通じて他人を思いやれる薬剤師となることを願っています。

優秀賞（書評の部）

優れたリーダーとは

経済経営学部 マネジメント学科 3年次生　**高村　勇気さん**

書　名　リーダーは話し方が9割
著　者　永松　茂久
出版社　すばる舎

　本書は、「どうすれば下の立場の人たちにもっとうまく伝わるだろう？」というリーダーの悩みを解決させることを目的としている。「なぜ、あのリーダーの話し方はひとを動かすのか？」、「人をやる気にさせるリーダーの話し方」、「嫌われないリーダーの話し方」、「人前で緊張しない話し方」、「あの人のためならと言われるリーダーの話し方」の五つの章に分けられている。

リーダーと聞くと数多くの人に影響を与える人、大きな会社を率いる有名な経営者などを想像する人が多いかもしれない。本書では、「先輩」と呼ばれる立場の人、コミュニティの責任者、学校の先生、親といった「一人でも導くべき人がいる人」のことを指す。実は、ほとんどの人がなんらかの立場のリーダーに当てはまる。

本書の筆者も飲食店の経営者時代、スタッフのことで悩み、たくさんのリーダー本を読んできたが、実際にスタッフたちとコミュニケーションがうまくいくようになったのは、たった一つのことを意識するようになってからである。それは、「相手の立場や気持ちを理解し、寄り添う気持ちを持って話す」ことである。この一つのことを意識することで、「愛されるリーダー」になれる。

この本を読むことで、「話し方に対しての苦手意識が軽くなる」、「下の立場の人と話すのが楽しくなる」、「チームがうまくいく」、「コミュニケーションのストレスが減る」といった様々なメリットを得ることができる。

部下やメンバーにやる気を持ってもらうためには、特別感を与え、自己重要感を感じさせることが重要である。自己重要感とは、立ち位置や実績というものが絡んできた中で満たされるものである。役割を与えて、自分が重要な役割を担っていると感じさせることで、組織において、自分は必要な存在であると感じることができる。組織にとって自分は必要であると感じることで、自分の役割に対しての責任感が生まれる。人には、長所短所があるのでその長所を生かせるようにし、組織にとって必要な存在であると伝えることが必要である。

指示を与えるうえで、「なぜを伝える」ことが重要になってくる。「なぜを伝える」とは、何かをする上で、目的を伝えるということである。リーダーとして目標を伝えることは、非常に重要であるが、優秀なリーダーほど、目標以上に目的を正確に伝えることができる。人は、意味を求める生き物である。「この仕事が必要なのか？」「この仕事は、どんな意味を持つのか？」といった疑問を明確にすることができればモチベーションの向上につながる。下の人の「なぜ」という疑問に対して、向き合い、リーダー自身も「なぜ」という問いかけを行っていくべきである。

私は、卓球部の主将を務めており、優れたリーダーになりたいという想いから本書を読んだ。本書では、実際に実践しやすいものが紹介されていたため、すぐに本書で学んだことを実践していきたい。カリスマ性のあるリーダーではなく、メンバー一人一人を大切にし、一緒に成長していくリーダーになりたい。

審査委員講評　**大東　万里絵**（国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科准教授）

高村さんの書評には、この本の要約やこの本から得られること、この本を読んだきっかけなどが、うまくまとめられている。この本にはリーダーのみならず、人と関わる全ての人にとって良好な人間関係を築くためのヒントがたくさん述べられている。また相手のやる気を引き起こす魔法の言葉なども述べられており、我々教員にとってもたくさんのヒントを得られる本だと思った。良いリーダーになろうとするのではなく、相手の立場になって理解し、寄り添う気持ちを持って話すことが、いかなる場面においても、良い人間関係を築く基本であるということを改めて気づかされる。

◆◆　第 23 回読書感想文・第 5 回書評コンクール受賞者からのコメント　◆

◆

第 23 回読書感想文・第 5 回書評コンクールで、最優秀賞、優秀賞、佳作を受賞した 15 名から次のとおり受賞のコメントをいただきました。

最優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 5 年次生　**宮崎　琴音**さん

最優秀賞を頂くことができ、大変光栄に思っています。よほど印象に残る本でないと記憶から薄れていってしまいますが、自分が題材に選んだ本の内容は不思議と覚えています。読書感想文コンクールは自分が本から着想した考えを人と共有できる（しかも先生方にまで！）滅多に無い機会です。感想文を書いて提出することは読書体験を一層深いものにしてくれると感じています。今後もこのコンクールが普段本を読む人に限らず、広く感想文を共有できる場として続いていけば嬉しいです。この度はありがとうございました。

（読んだ作品：『君たちはどう生きるか』／ 吉野源三郎著）

優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 5年次生　　**越田　開成**さん

優秀賞を頂いて、とても気持ちがいいです。授賞式でいただいた5,000円の図書カードは、翌日には紙切れと化してしまいました。しかし記念にと思い、今でも大事に保管しています。

私にとって読書は、大体が退屈です。けれども、「この文章を読むために今までの人生があったんだ」と思えるような、そんな一文の、一言。その刹那を求めて、今日も私は本を読んでいます。

（読んだ作品：『信仰』／ 村田沙耶香著）

優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生　　**上村　朋代**さん

この度は、優秀賞に選んでいただき、ありがとうございます。私は、あまり読書が好きではなく、読書感想文を書くこともとても苦手でした。しかし、本を読んで終わるのではなく、感想を考えたり、自分の立場になって想像したりすることで、たくさんの発見があって読書と読書感想文の面白さに気付くことができました。これからも、本を読んでいきたいなと思いました。ありがとうございました。

（読んだ作品：『母性』／ 湊かなえ著）

優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生　　**花山　勝薫**さん

この度は優秀賞に選んでいただき、身に余る光栄です。今回の読書感想文では、本を読むことでただ楽しむのではなく、何か学びを得ようと考えて本を選びました。宗教についての本を読んで文を書くことは、自分にとって難しいことなのではないかと最初は思っていました。しかし、自分に適切なレベルの作品を慎重に吟味し、挑戦したことで自分の見聞を深めることができたのではないかと今では満足しています。このような機会を与えてくださったことに、深く感謝申し上げます。

（読んだ作品：『親鸞入門:その生涯と教えの深さ』／ 前田専學・山崎龍明編著）

優秀賞（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生　　**堀井　梨央**さん

この度は優秀賞に選んでいただき、ありがとうございます。選書した本は、「愛」や「人生」がテーマであると感じ、登場人物の心情や言葉も共感することが多く、素晴らしい作品に出会うことができました。ぜひ、皆さんの手に取って読んでいただきたいと思う本です。また、今回は自分の考えを文にすることで、新たな自分の内面を知ることができたと思います。これからはこの本に限らず、新たな自分の価値観や考えを広げるためにたくさんの本と出会いたいと思います。貴重な機会をいただきありがとうございました。

（読んだ作品：『汝、星のごとく』 ／ 凪良ゆう著）

優秀賞（書評の部）

経済経営学部 マネジメント学科3年次生　　**高村　勇気**さん

このたびは、優秀賞に選んでいただき、ありがとうございます。書評として、読んだ本の魅力を紹介することで、より本の内容を理解することができると感じております。今後も、読書習慣を身につけて、自身の成長に繋げていきたいと思います。

（読んだ作品：リーダーは話し方が9割　／ 永松茂久著）

佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 3年次生　　**千秋　璃々香**さん

この度は佳作に選んでいただき、ありがとうございました。今回のコンクールを通して、他者のものの見方から自分のものの見方を考え直すことが出来ました。これからも読書を続けていくことで新しい視点を取り入れ、より幅広い思考ができる人間になりたいです。ありがとうございました。

（読んだ作品：My Medical Choice〔新聞記事〕　/ANGELINA JOLIE 著）

佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 2年次生　　**辻谷　侑海**さん

この度は佳作に選んでいただき、ありがとうございました。息抜きで読んだこの本に衝撃を受け「もっとこの本を知ってもらいたい、この感動を心に留めたい」と感じ、久しぶりにこれほどまでに心が揺れ動かされる読書経験ができました。重ねて感謝いたします。

（読んだ作品：『流浪の月』/凪良ゆう著）

佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生　　**小道世　羽奏**さん

この度は佳作に選んでいただきありがとうございます。この本を通して、命の尊さ、大切さを改めて感じることが出来ました。これからも読書を通して色々なことを学び、たくさんの知識を得たいと思います。ありがとうございました。

（読んだ作品：『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』/ 汐見夏衛著）

佳作（読書感想文の部）

薬学部 薬学科 1年次生　　**友野　貴美子**さん

この度は佳作に選んでいただき、ありがとうございました。今まであまり本を読んだりしてこなかったのですが、今回の読書感想文を通して、読書の面白さを知ることができました。

（読んだ作品：『人魚の眠る家』 / 東野圭吾著）

佳作（読書感想文の部）

経済経営学部 マネジメント学科1年次生　　**中村　優奈**さん

この度は佳作に選んでいただきありがとうございます。私が本を読むきっかけを作ってくれたのはゼミの先生でした。私のゼミでは全員参加のコンクールでしたが、せっかく出すのならば真剣に取り組もうと思いました。そこで私が以前から気になっていた本を選び、その本が私に沢山の勇気をくれました。本を読むことの大切さに改めて気付き、自分と向き合えることができて本当に良かったです。これからもっと沢山の本を読んでいきたいと思っています。

本当にありがとうございました。

（読んだ作品：『私は私のままで生きることにした』 / キム・スヒョン著・吉川南訳）

佳作（読書感想文の部）

医療保健学部 医療技術学科1年次生　　**矢野　菜月**さん

この度は佳作に選んで頂きありがとうございました。

また、久しぶりに本を読む機会を与えて下さりありがとうございました。いじめ問題はすぐに解決できるようなものではありませんが、考える人が増えるとより良い解決策ができてくるのではないかと考えています。是非この本を読んでみてください。

（読んだ作品：『その日、朱音は空を飛んだ』 / 武田綾乃著）

佳作（書評の部）

国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科２年次生　**石垣　風空**さん

この度は佳作に選んでいただき、光栄に思います。この本を選び、自分の中で「男女の価値観」というものの考え方が大きく変わったように思います。これからの社会が全ての人にとって暮らしやすいものへと変化することを願っています。貴重な機会をこうして設けていただきありがとうございました。

（読んだ作品：『だから、男と女はすれ違う：最新科学が解き明かす「性」の謎』／奥村康一・水野重理・高間大介著）

佳作（書評の部）

国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科２年次生　**土田　りの**さん

この度は佳作に選んでいただきありがとうございました。この本をきっかけに、改めて多様性やジェンダー平等について深く考えることができ、私にとって印象深い作品になりました。

本を読むことで新たな考えや価値観を得ることができるため、これからも様々な本を読んでいきたいと思います。ありがとうございました。

（読んだ作品：『トランスジェンダーを生きる：語り合いから描く体験の「質感」』／町田奈緒士著）

佳作（書評の部）

国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科２年次生　**徳堂　深月**さん

文章を書くことは得意ではありませんが、読んで心に残った本を他の人に読んでもらいたいという思いによって、今回の書評を書こうという意欲につながりました。初めて自分の書いた文章で賞をいただき、とても嬉しく思います。

（読んだ作品：『歩きながら考える』／ヤマザキマリ著）

◆◆　寄　贈　図　書　◆

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

自著		寄贈者
『泰山諸神の信仰の展開：東岳大帝から碧霞元君へ』	計１冊	二ノ宮　聡 （国際コミュニケーション学部 国際コミュニケーション学科講師）

編著		
『臨床工学技士国家試験・ME 試験対策　要点まとめ　おたすけノート』	計１冊	髙橋　純子 （医療保健学部医療技術学科教授）

その他		寄贈者	
『何者』他	計 31 冊	泉　洋成	（理事）
『きのうのオレンジ』他	計６冊	田邊　良和	（図書館事務課長）

北陸大学図書館報　NO. 56　令和６年３月 29 日発行

編集・発行：北陸大学図書館　〒920-1180　金沢市太陽が丘１－１　TEL. 076-229-3021　FAX　076-229-4850

E メール：lib@hokuriku-u.ac.jp　北陸大学図書館ホームページ：https://www.hokuriku-u.ac.jp/library/

長期ビジョン　北陸大学 Vision50（by2025）……2025年までに学生の成長力No.1の教育を実践する大学となる。